は科學であると同時に藝術である」と云ふフランス史學の今一つの傳統的性格こそドイツ史學に對し深き反省を與へるものではなからうか。紙數の關係より止むなくも簡單にせられたミシュレーに開花する此のフランス史學の性格も、他日坂口博士の「獨逸史學史」にも比肩し得るやうな「佛蘭西史學史」となつて併せて考慮されん事を望んで止まない。殊に著者は猶春秋に富むの俊秀であるが故に此の願望の一層切なるものが存するのである。

然し、本書の持つ明晰にして流麗なる文體はそれ自ら著者が深くフランス史學の本質に到達せるものである事を物語るものでなくて何であらう。敢へて江湖に薦める次第である。（教養文庫　弘文堂發行　定價五拾錢）（豐田）

日本地政學

小牧實繁著

「地政學」なる語が叫び出されてより、未だ幾何もないのであるが、現在では一の流行語、時局語と化し、地政學は興隆の波に乘つてゐるかの如き感がある。而もその本質、方法等に就いて之程種々論議をかもし、論駁を重ねられたものは尠い。又今迄の述作を見ても多くは獨逸地政學の紹介、飜譯、模倣に終始し、日本の主體性を把握した日本地政學が殆んど行はれず、却つて日本の進路を遮り、限るが如き逆效果をさへ生じたものゝあつた事は實に遺憾の極みである。最近に於ても「地政學は未だ內容も方法も定つたものではない」。「邦人の手に依つて東亞を中心とした地政學論も現れてゐるが、此等の內容は單なる時局的宣言か、或は何等具體的內容を伴はないものである」。「ゲオポリチークは地理學、民族學、史學を統一する高次のものではなく」、「素朴な環境論的な主體的把握によつて可能なものである」等と主張せられてゐる有樣である。此の時に當り、日本地政學の樹立を高唱し、その進むべき方向を明示して先覺者的役割を持つた「日本地政學宣言」の續卷、展開と見らるべき本書の刊行を見た事は大なる喜びである。

而も本書は「今や時代は學者が單なる象牙の塔にのみとぢ籠るを許さなくなつた」と時代の趨勢を深くも洞察された著者が「唯身邊の多忙を口實として」「諸新聞、諸雜誌に對する」「執筆を謝絕するが如き」を潔しとせられず「能力の許す限り執筆を承諾」され、「某雜誌の如きには遂に騙られながら執筆の約を果」されたものゝ集成である。著者はその序に於いて「併しながら君の恩、國の恩、師の恩、父母の恩なくして」「また優れた同憂の士の絕えざる鞭韃指導なくして」、「此の書の如きも遂には成り得なかつた筈である」と言ふ。かくの如くんば、此の書は結局、實に著者の止むに止まれぬ至誠から生れたものであるとすべく、著者の誠心は全篇至る所に火の塊となつて迸出してゐるのである。長期戰に於ける緒戰の戰果に醉ひ、皇軍將士の血の奮鬪に狎れて、未だに心中の米英の驅逐されないものが遺憾乍ら見出される時、かゝる誠の書の刊行を見た事はそれだけでも喜ばしい事である。

本書は先述した樣に既作論考を、大體日附順に編成されたものであるが、概略次の三部に分つ事が出來ると思ふ。即ち「天壤と興に窮りなく永久に生成發展して止るところのない皇道に即し、我が聖國の國體觀を體しつゝ」、「天業恢弘の大業に翼賛し奉るべく、政治の大局に指針を供與する」のが日本地政學の目的、使命であり、それを達成、完遂する方法は「歴史と地理、地理と歴史の一體的研究」「換言すれば時空一如、空時一如の研究」にあり、而も「斯かる地理と歴史の一如的研究は」「最早從來の意味に於ける單なる」歴史や地理の研究でなく、「それは實に歴史と地理、地理と歴史なる全く新たなる學の研究、一の高次の學の研究である」と日本地政學の本質、課題等を烈々たる信念を以て、感激ある言葉で强調せられる第四章迄を第一部とすれば、此の使命、方法論の上に立つて世界の各地域を對象として取扱はれた第十八章迄は第二部である。地域は東北はアラスカより、西南は南阿に及び、「常に皇國日本最重要の問題にのみぶつかつて行く」日本地政學はよく各地域に於ける白人に依る侵略、歪曲を指摘し、皇國日本の進路を明々と指示して餘す所がない。最後の二章は世界の根軸日本の科學的基礎付を文化的、民族的、自然的に示されたもので、云はゞ第三部をなすと見る事が出來る。既作論考の集成とは云へ、全篇憂國の志に燃え、又世界の盟主、世界新秩序建設の指導者として、皇軍の示した雄渾なる大戰略そのまゝに、否大作戰に寄與するかの如く、堂々と獨自の分野を開拓されたものであり、一般地政學關係者は勿論廣く江湖の一讀をすゝめる次第である。（十七年十月　大日本雄辯會講談社發行　定價貳圓）（岡本信太郎）

土耳古、シリア、パレスチナ トランス・ヨルダン（世界地理政治大系）

野間三郎著

對米英宣戰の大詔渙發せられて一周年、その記念日の感激も未だ生々しい。十二月八日といふ日はなんといふ偉大なる日であつたことであらう。それは併しながらハワイにマレイに或は又フィリッピンに米英膺懲の鐵槌が天降つたからのみではない筈である。それは國の内外に亙る大きな轉回面の開け行く軸となつた。この日を境として我が國人の物の考へ方が、日本觀、世界觀が逞しく飛躍を遂げたからである。人々は新しい衣に裝を改めた。それは眞に喜ばしい涙ぐましい姿であると言はなければならい。併しながら、その足場の高さにはなほ甚しい懸隔があり、見定めようと努力しながらもその視線の方向は區々で動搖さへも免れてゐない。われわれは今日も尙ほ一層言ふべき多くの言葉を有ち、呼びかけるべき自己の使命を感ずるといふならば、それは愼しみを忘れた言辭として非難せられることであらうか。併しながら、少くとも世界各地域を如何に把握すべきかを顯示することは我等地理學徒の前に提起せられた課題であると言ふべきである。